

1791年エカチエリーナ二世が聴いた大黒屋光太夫の尺八

貴志 清一

1791年、ロシア皇帝エカチエリーナ二世は尺八本曲「恋慕流し」を聴いたと想定されます。現行の琴古流本曲「鈴慕流」と同一曲です。

1791年といえは鎖国をしていましたので日本人の海外渡航は完全に不可能でした。その日本人がロシアの夏の宮殿で世界史上有名なエカチエリーナ二世に尺八を聴かせた、というのは全くおとぎ話のようなものでしょう。

しかし、可能性は極めて高いのです。

その日本人の名は大黒屋光太夫（だいくくや こうだゆう）。

伊勢（三重県）の廻船問屋の船頭で天明2年（1782年）に伊勢白子港より紀州藩の廻米などを積んで江戸に向かう途中に暴風雨に遭って難破。半年以上も太平洋を漂流しアリユーシャン列島のアムチトカ島に漂着。筆舌に尽くしがたい生活を何年も送り流木を使って船を造ってカムチャツカ半島に渡った。そこはすでにロシアが占有していてロシアの法の下にあったのですが帰国はオホーツクに

行つて交渉しなければならぬことがわかり苦勞してオホーツクに渡ります。ところがそこでも許可が下りず気温が-50℃にもなるヤクーツクを経てバイカル湖のあるイルクーツクに到着します。この時点で江戸に向かつた船乗り17人が6人にまで減っていました。すなわち三分の二が死亡してしまつたのです。

帰国の幽かな希望を持つてたどり着いたイルクーツクでしたがやはり帰国は不許可。ちようどロシア帝国に仕えていたキリール・ラックスマンという博物学者の絶大な援助を受け、彼の助力の下に直接ロシア皇帝エカチェリーナ二世に直訴するため光太夫はサンクトペテルブルクに行きます。苦勞の挙げ句、光太夫は女帝に拝謁し帰国の許可を得ることができました。艱難辛苦の末1792年、キリールの息子のアダム・ラックスマンに送られて帰国することができたのでした。

この光太夫の数奇な運命については研究書もあり井上靖の「おろしや国酔夢譚」は映画にもなりました。

ここでは人物叢書「大黒屋光太夫」、岩波新書「大黒屋光太夫」、岩波文庫「北槎聞略(ほくさぶんりやく)」(北槎と表記)。

そして「大黒屋光太夫史料集(一)」「(四)」(史料と表記)等を元に考察します。

〈光太夫は尺八を嗜み身近に持っていた〉

まず話の順序として光太夫は尺八を持ったまま遭難し10年の漂浪の間、常に尺八は彼の身边にあったのかどうかです。

これは光太夫自身の談話から分かります。

「オホーツカ（オホーツク）の県官イワン・フョウドウエチ・クリン（フコードロヴィチ・ノリン）に尺八を教えたりし。かの国になきものなれば面白がりたり。れんぼ（恋慕流し）相応に出来たりしゆえ、尺八をもやりて来たりし。」（『幸太夫談話』史料（三）
P299）

1792年の帰路、オホーツクで知り合いの役人に請われて尺八を教えたと言っています。しかも教えたのが「恋慕流」という尺八曲名までわかるのです。竹がなければ教えられませんので光太夫は尺八がよほど好きだったのでしょう、1782年の乗船時に尺八を携えていたことがわかります。しかも彼の地で本曲を教えるほどの腕前だったこともこの資料から窺えます。

〈光太夫の生い立ちと尺八〉

寛延2年（1751年）生まれ。

光太夫の生家は伊勢の南若松村の亀屋四郎治家で、船宿を営む裕福な家だった。末っ子だった光太夫は母親の秘蔵っ子として育ちます。

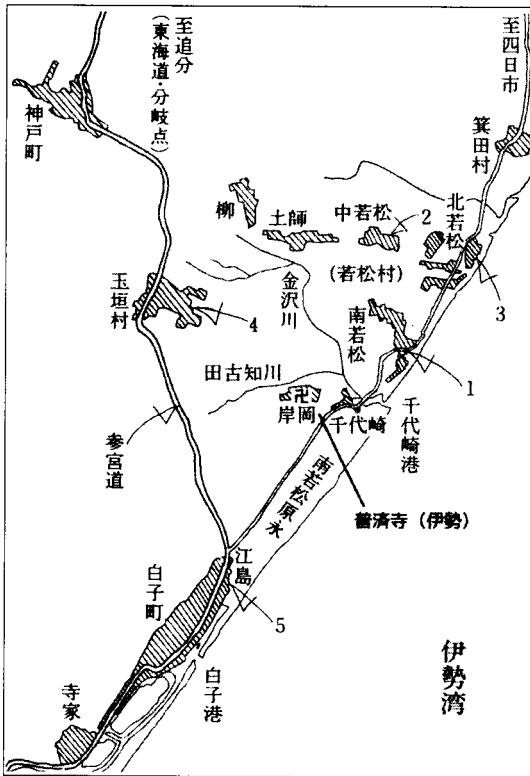
幼・少年時代を過ごした南若松村の隣村が岸岡村です。距離にして1、2 kmでしょうか、ここに伊勢唯一の明暗寺末・普濟寺があつたのです。（塚本虚童『古典尺八及び三曲に関する小論集』

伝説ですが名曲「手向」

がこの普濟寺からでているということですよ。

光太夫は14歳頃まで伊勢に居たわけですから隣村の普濟寺に集まる虚無僧達の尺八をしばしば耳にしていたことでしょう。もしかすると生家が裕福でしたので直接習いに行った可能性も否定できません。

(地図)



『大黒屋光太夫史料集(三)』
P324より

P233
()

長じると兄と同様に江戸へ出ました。奉公先は、小網町にあった母方の木綿商の出店だった。それは明和元年（1764年）頃のこと、江戸での商人修行は田沼時代のただ中、尺八は武士以外は吹いてはいけないという建前はあつて無きがごとしで大いに尺八が流行していました。光太夫が尺八を覚えたのも江戸暮しの中であつたでしょう。

安永7年（1778年）、28歳になつた光太夫は故郷へ戻ります。

そして天明2年（1782年）神昌丸の船頭として江戸に向かつたのです。

〈遭難〉

例年にない激しい嵐で駿河沖で遭難。舵も帆も失つて半年以上太平洋を漂流し極寒のアリユーシャ列島の島に漂着します。その間に死人も出てその艱難は筆舌に尽くしがたいものがありました。

漂流中に光太夫はふと気が向いて尺八を手にして無聊を慰めたでしょう。吹き終わると、絶望に打ちひしがれている船乗りたちのすすり泣きする声でしたかもしれない。尺八のどこかもの悲しい音色が、故郷での日々を思い出させます。なぜなら尺八の音色は深い悲しみのこもつた音です。心が沈んでいるときに聴けばその音に触発されて一気に悲しみが溢れます。涙とともにその悲しみが体外に出るので、それは大きな心の浄化（カタルシス）になり人間の心を癒します。尺八は心の治療力を持つているのだと思います。

〈漂着後〉

漂着したのはアムチトカ島。それでも苦勞の連続で望郷の思いは募るばかりだった。ここではエカチエリーナ二世治下の植民地政策・領土拡大に燃えるロシア人が原住民を搾取していた。光太夫達は生きるために現地語もさることながら、ロシア語を必死に覚えようとした。「外国語は難しい」「勉強嫌い」と言っている場合ではなく、島を支配しているロシア人に対処するにはロシア語習得は生命に関わることだった。ロシア人達は火器をふんだんに所有しているので光太夫たちは生殺与奪権を相手に握られているようなものだった。

やがてそのロシア人達とも言語習得のかいあって友好的な関係を結ぶようになった。5年に1度来る交代用の船が難破したので船と一緒に造りようオホーツクにたどり着く。

オホーツクに着けばそこはロシア領。ロシアが勝手にシベリアに繰り出してきて「ここが俺たちの領土」という身勝手な論理だが、そこが領土なら光太夫達はその支配下・監督下に入り自由な行動はできなくなります。

「日本へ帰る」ためにシベリア第一の町、バイカル湖の近くのイルクーツクに帰国の交渉をしに行きます。極寒のシベリアを西に進みます。乗組員の一人、庄蔵は凍傷のため片足を切断しなければならなかったほどの寒さ。しかし、イルクーツクでも帰国の嘆願は聞き届けられませんでした。

ここで有力な助け人、有名な博物学者キリール・ラツクスマンと出会います。その助けで帝都サン

クトペテルブルクに行き、直接皇帝に直訴する方法をとります。

〈馬轡で、まつしぐらに帝都へ〉

1791年（寛政3年）1月15日、九右衛門の葬儀をあわただしく終えた翌朝のことだった。キリール・ラツクスマンと光太夫は、8頭立ての馬轡でイルクーツクを出発した。一行はキリールの4男アファナーシイ、護衛の従卒と御者を加えた5人。公用なので、キリールの旅費は政府から支給されたが、光太夫については、すべてキリールが負担してくれたのだという。

光太夫はキリールより、女帝陛下の謁見に備え、日本から持参した持物は何もかも携えるようにいわれた。船頭の正装一式、伊勢神宮の宮居、阿弥陀仏如来の画像、小判や銀錢、尺八など、光太夫はみなもれなく積込んだ。他に浮世草子数冊も忘れなかった。それは異国でただひとつ目にするのできる日本語の文字でした。

因みにこの光太夫所持の浮世草子は残っていません。サンクトペテルブルクの科学アカデミー図書館に保管されています。書名は『源平曦軍配（げんぺいあさひぐんばい）』。その裏表紙に光太夫の書き込みがあります。

「ミナ 海エオトシテ 此ホンバカリ ノコリタリ 一サツモノデ ヨムニタヨリナイ ナカニ
ホンガアリテモ ナミダガ コボリテイ ドモ ヨマレン」

伊勢方言の交ざった文ですが異国の地での望郷の念がひしひしと伝わってくるようです。(椎名誠『シベリア追跡』P211)

さて、めざす帝都ペテルブルクは、正規の名称を「サンクトペテルブルク」と呼び「聖なるペテロが守りたもう町」の意味です。ロシア帝国の創立者ピョートル一世は1700年、スエーデンとの戦い後バルト海進出を果たし、そして、現下の皇帝エカチェリーナ二世の治世下こそ、ピョートル大帝によって着手された西欧文化移植の事業が、新帝都において花開いた時であった。ドイツの小貴族の家に生まれた女帝は、1762年、33歳の時に夫のピョートル三世から帝位を奪って皇帝の身となる。

モンテスキューらのフランス啓蒙思想に共鳴する女帝は、人権の擁護、教育機関の新設、文芸の保護と育成など、開明的な諸政策を次々と実施し啓蒙君主の名声を高めた。エカチェリーナ二世の時代に、ロシアではジャーナリズムとインテリゲンチア（知識人）が生まれたといわれている。その一方、専制君主としての女帝は、ポーランドの分割で西方領土を拡大、対トルコ戦争に勝利して黒海を支配下に収めるなど、ロシア帝国をさらなる隆盛の大国に導き、やはり「大帝」と尊称されていた。この年、エカチェリーナ二世は62歳であった。

光太夫はいま、この西欧文化渦巻く花の都へまっしぐらに向かっていた。途中、古都のモスクワに一夜泊しただけで、5823露里の全行程を、8頭立ての馬櫓はひた走りに走り、2月19日にペテル

ブルクへ到着した。

〈ソフィアの歌〉

光太夫達の帰国交渉を始動させたキリール・ラツクスマンは、宮廷への働きかけに奔走します。そのうちに光太夫は、滞在先のブシという人の下の妹ソフィアと親しく話を交わす仲になった。光太夫が日本に残してきた故郷妻のことを打明けると、ソフィアはとても同情した様子であった。そして、澄んだ声で歌をうたってくれた。歌詞は都会に奉公に出た若者と郷里にとり残された娘が、互いの切ない心根を伝えあう相聞歌風のもので、実は帝都で人気のウクライナ民謡の流行唄だったのだ。ソフィアは歌詞の内容が光太夫の境遇にあまりに似ているゆえ、それをうたって慰めたのであった。

そんな事情を知らない光太夫は、ソフィアが自分のために作詞してくれたのだと思い込む。

秋になり、光太夫がまた帝都へ戻ってくると、その歌は盛んにうたわれていた。世間では自分と故郷妻との秘事が、これほど評判を呼んでいるのか——そう思つて一驚してしまったのだ。もっとも、光太夫がそんな錯覚に陥つたのには、無理からぬ面もあったようだ。光太夫がその流行唄を口ずさむと、聞いているロシア人たちは、みなこういった。

「涙が出てとまらない。」

「うたうのはやめてくれ。」

光太夫が日本語に直してみせた歌詞は、以下の通り。

ああ、たいくつや、我れ他の国、皆々たのむ、みなすてまいぞ、なさけないぞやおまえがた、見む
きもせいであちらむく、うらめしや、つらめしや、いまはなくばかり。(北槎
P248)

実際にこのウクライナ民謡の楽譜が残っています。(五木寛之『ソフィアの歌』図版)

前半は長調の宮廷音楽風、後半はウクライナ(ロシア)民謡風です。

それにしてもロシア語に感情移入し現地人を涙させるほどの語学力を光太夫が獲得していたという
事実は大きいと思います。言葉は使うことによって自国語・外国語にかかわらず自分のものになると
いう証明です。

〈エカチエリーナ二世の謁見〉

五月もはや中頃を過ぎた頃であった。ブオロンツォフ伯爵より、キリール・ラツクスマン宛の通達
が届く。書面には、来たる28日、女帝陛下の謁見が許された。当日は、日本人漂流民光太夫を召連れ
参るべし。その数日前に、謁見時の諸作法を教示する演習を行う——とあった。キリールから吉報を
聞き、光太夫の顔中が感激で輝いたが、キリールの喜びはそれ以上だった。この間、休むことなく続

けてきた宮廷工作の苦勞がやつと身を結んだのである。

演習の日、夏の離宮の大広間に案内された光太夫が教えられた礼儀作法は、けっこう面倒なものだった。

女帝陛下の玉座まで伺候する。そこで片膝を折ってうやうやしく拝礼し、差出された女帝の御手の甲に3度、唇を軽く触れる。何回となく所作をただされたが、光太夫は作法のいっさいを覚え込んだ。その後、光太夫夏の離宮に行きつつがなく謁見し、結果として帰国を許されることになる。

もちろん、植民地的拡大を目指すために物資の調達、そしてあわよくば植民地化するためにも日本との通商は不可欠で、そのための交渉の糸口に光太夫達の漂流民を使うという筋書きが帰国許可の大きな伏線になっていたことを忘れてはいけません。

〈エカチエリーナ二世と光太夫の尺八〉

4巻にも及ぶ『史料集』の労作を出版した山下恒夫も解題で尺八のことに言及しています。（史料集 P740）

ここで非常な興味を抱かせられるのは、その愛用の尺八を、光太夫がロシア人社会において、いかに活用したかという問題である。神昌丸の漂海中、光太夫が手なぐさみに尺八を吹いたことは間違いない。アムチトカ島、ニジネカムチャーツク、イルクーツクではどうだったのだろうか。やはり

尺八は吹いたに相違なからう。竹管楽器は西欧世界にはない。物珍しさも手伝って、光太夫の尺八の演奏は大いに歓迎され、光太夫がロシア人社会に溶けこむすこぶる有効な手段となったのではなからうか。音楽には国境はないからであるし、尺八は言語を伴わない楽器だからである。

そして、ペテルブルクではたしてどうだったか。キリール・ラックスマンがイルクーツクで、光太夫の尺八の音色に耳を傾けたとすれば、帝都への出発にあたって、尺八はぜひとも持参するよう進めたと考えられる。脇差も加えた廻船船頭の正装一式、伊勢大神宮のお抜いまでも、光太夫はペテルブルクへ携えているのだ。女帝陛下の恩寵を得るためには、そうしたほうがいいというキリール・ラックスマンの助言に光太夫は従ったのである。もし、そうであつたのなら、好奇心旺盛だったエカチェリーナ二世が尺八持参の一件を耳にし、光太夫にその演奏を命じたのはきわめて自然に考えられることである。

光太夫自身「その後も何度か女帝のお召しがあり」と言っているので、帰路オホーツクでロシア人に教えた「恋慕流」のような尺八本曲をエカチェリーナ二世は聴いたのだと思います。（北槎 P54）

〈帰国決定後〉

帰国の許しが出たのちの光太夫は、毎日が目のまわるような忙しさになった。ピョートル大帝廟、帝都の西方にあるペテルゴフの夏の宮殿などの名所巡り。芝居見物にも出かけた。舞台には本物の馬

が登場したとあるから、それはオペラだったのかもしれない。

「北槎聞略」を読んでも、オペラ（芝居）などは興味深く記述している。

ただし、西洋器楽曲などには賛辞を与えているのだが西洋のベルカント的な唱法には少々閉口したらしい。

初頭音楽教育に関わった私の経験から言えば、普通の日本の子供に音楽鑑賞と称してオペラの aria やイタリア民謡などを聞かせると先ず歌い出しの一声で大笑いになります。そのうちその声を上手に真似る子供も出てきて、その声で爆笑が止まらなくなる。そのうち自分も笑いの渦の仲間入り。中には行儀の良い賢い子もいるのですが、その子は笑いを必死にこらえて肩をふるわせている……。そんな経験をよくしました。

光太夫も同じようなことを述べています。

（ある宴席で ……腰元などが提琴《ヴァイオリン》西琴などを演奏していると）

「……ユスポーフはもとより糸竹に堪能の者にて、提琴をとり腰元らが調べに和わせて歌う。声、清亮（せいりよう）にして梁の塵も飛翔すべし。」

さりながら光太夫ばかりは聞き慣れざる鳴り物に唱歌もさだかならねば、笑いを忍びて聞き居たり。」

（北槎
P195）

さて、いまや帝都一の話題の主となった光太夫に、政府高官・学者や富商たちからの招待が殺到した。自分の宿舎で夕食をとることがめつたにないくらいだった。

やがて帰国のためペテルブルクを後に一旦イルクーツクに戻ります。

〈帰国の途へ〉

イルクーツクを出発した光太夫はロシア国の用意した船の出るオホーツクに到着。オホーツクでは、カムチャツカ半島のチギーリの守備隊長だったイワン・ノリンが政庁の役人として転任してきていた。旧交を復活させた光太夫は、このノリンに尺八を伝授した。

エカチエリーナ号の出航が予定よりずっと遅れたことが、尺八の伝授には時間がとれて都合良かった。ノリンはとても筋がよく、名品「恋慕流し」をどうやら吹けるまでになった。それで、ノリンの努力も祝して別れの記念にと尺八を贈ると、それはそれは大喜びだった。

もしこのことがなければ、もしかすると大黒屋光太夫記念館あたりに彼の使った尺八が展示されていたかもしれません。

「オホーツカ（オホーツク）の県官イワン・フョウドウエチ・クリン（フコードロヴィチ・ノリン）

に尺八を教えたりし。かの国になきものなれば面白がりたり。れんぼ（恋慕流し）相応に出来たりしゆえ、尺八をもやりて来たりし。」（再掲『幸太夫談話』）

光太夫が江戸で尺八を習ったとすればだいたい1770年あたりであり、このころは黒沢琴古父子が演奏・製管での名手だった。そして宇土藩の藩主細川興文（おきのり）も江戸在住の時は琴古に尺八を習っていました。興文は1772年に引退するのですが、その時はもう師範の腕前で「本則」も貰っています。今もこの興文自筆の琴古流本曲「恋慕流」が残っています。（小菅大徹『江戸時代における尺八愛好者の記録』P62）

おそらく同時代の光太夫もこの譜面に近い形で「恋慕流し」を吹いていたのでしょう。

〈帰国〉

光太夫、アダム・ラックスマン一行は無事根室に着きます。

このあとロシア・日本の思惑が交差して帰国が一時危ぶまれますがなんとか日本に帰ることができました。無事に帰ったのは17人の乗り組み員のうち光太夫と磯吉のたった2人なのでした。